〈特別寄稿〉

学会三十周年へ向けて

――その時歴史は動くか？――

峰島旭雄

比較思想学会は明年、すなわち二〇〇三年（平成十五年）に創設三十周年を迎える。

三十年といえば一世代（one generation）であって、第二次世界大戦後に設立された全国学会としては長いキャリアも持つと言えるのではなかろうか。一九七四年（昭和四九年）、今にして見ればわずか五百名の会員で呱々の声をあげた本学会はいまや一千名を超す、名実ともに、質量ともに備わった全国学会となっている。一昨年他界された創設者、中村元博士も、おそらく本学会がこのような発展を遂げるとは、お考えでなかったかもしれない。

たまたま私がこの一文を書いているこの日、この晩、ＮＨＫテレビで「その時歴史が動いた」を放映していた。第一次世界大戦終結時にベルサイユで締結された講和条約に、国際連盟（League of Nations）規約も含まれていた。日本（その全権委員は牧野伸顕）がこの規約の冒頭に掲げるべく提案した「人種差別の撤廃＝人類平等」の理念は、アメリカほかの列強の反対にあい、十一対五で賛成多数であったにもかかわらず、全員賛成でないという理由で、アメリカ大統領ウィルソンによって否決された。一九一九年（大正八年）のことであった（ベルサイユ条約により国際連盟が成立したのはその翌年早々）。その後、第二次世界大戦を経て、約二五年後に、国際連合（United Nations）が成立し、そこには「人種差別撤廃＝人類平等」の文言が高々と掲げられた、とこの番組は報道している。

番組「その時歴史が動いた」は大正八年、牧野伸顕が無念の涙を呑んだ否決の瞬間、その時歴史が動いた、と言おうとしているのかもしれない。しかし実際には約二五年後、約一世代の後にそのことは成熟（じょうじゅく）している。歴史とはそういうもの

かもしれない。

教育学上でレディネス（readiness 準備態）という概念のあることは、先刻ご承知のことと思う。このレディネスなるものをどのように解するか、受け取るかはさまざまであろうが、そこには一見矛盾する二つの要因があるのではなかろうか。レディネスは、その事態が生起するまえの、ある時間がかかる積み重ねという要因があるとともに、それがまさに成熟し、その瞬間に突如として生起する（要因）ということである。ヤスパースもほぼ同じことを述べている（Bereitschaft）。あるいは仏教でいう因縁、因と縁もそういうことかもしれない。

比較思想学会は、設立後、一世代にあたる三十年をまさに迎えようとしている。それは三十年の累積が、レディネスが、いままさに成熟して、なにごとかが噴出する瞬間であるとも捉えることができる。

その一つとして考えられるのは、一世代の「世代」という同じ語を用いて言い表わされる「世代交替」である。三十周年は世代交替の時機でもある。創設者中村元博士はすでに幽冥界（さかい）を異にされた。中村博士を支えた当時の発起人、幹部の方々の多くもそうである。本学会の発端となった一九七三年（昭和四八年）の、学会成立以前のシンポジウム「比較哲学と教育」にたずさわった者は、一、二の方々を除いてはおそらく私のみがその間の事情を知る者として今ここにあるであろう。歴史と伝統は語り継がれていかなければならない。私はいまそのことを意識してこの一文を綴っている。

もとより、この古き良き歴史と伝統は、一朝一夕にして成ったのではないと同時に、いつも必ずしも古き良き歴史と伝統であったのではない。そこにはさまざまな紆余曲折、挫折があったことは言うまでもない。けれども、歴史と伝統はそれらのことを乗り越え、築き上げられるものである。反対の綜合といえば弁証法みたいだが、良き歴史と伝統の形成にはそのような面のあることは否めない。そしてたしかに、そのようなことがあって、そのようなことがありながら、本学会の今日が、三十年の歩みが、あるのである。

これが、本学会に関する私の歴史哲学である。以下、もう少し具体的なことを述べてみたい。

本学会は五年刻みでリニューアルをなしながら進んでいるといってよいだろう。創設五周年は早稲田大学で行われたシンポジウム「比較思想とは何か」をもとに一書を公にした。それは奇しくも比較思想方法論の論集となった感がある。いま奇しくもと記したのは、創立記念大会のシンポジウムのテーマが比較思想方法論であったからである（故川田熊太郎座長の提唱）。十周年は発祥の地、大正大学を会場に、二日間にわたっての大会が行われた。（それ以外はいつも一日限りの大会であることをむしろ特色としている。もっとも二日目にいわゆる研学研修が行われることもあ

るが。）このときは、海外の研究者を招いての講演会・シンポジウムも含まれた。十五周年は上智大学を会場に、そのころからホットイシューになっていた「生命倫理」をテーマとして大会が行われた。A・デーケン教授が独特のユーモアをまじえて提案をし、桑木務教授が提案を学会誌に文章化することなく病にたおれ、死者をフォルマリンづけにすることに絶対に反対した田村芳朗教授がその後なくなられたことが、強くきびしい印象として残っている。（このシンポジウムも一書を成した。）二十周年記念は大正大学で行われ、中村元名誉会長の公開講演「新しい世界をつくる比較思想」、シンポジウム「比較思想は現代に何を貢献しうるか」はともに、二十年の歩みを確認しつつ、改めて初心に立ちかえって比較思想とは何かを問い返し、今後の歩むべき道を積極的に探る試みであった。この姿勢はパネリストの次のような提題に端的に窺うことができる。岡山大学（当時）の酒井潔氏による「アナロギアの論理と現代世界」、博報堂（当時）の清水良衛氏による「比較思想の現代的役割」、桑木務中央大学名誉教授（当時）の「比較思想の未来」（なお、桑木氏急病のため代わってコメンテータ峰島がレジュメ代読）。そして二十五周年は、二十四年目から文京女子大学で、シェークスピア研究の小田島雄志教授の講演、女子大学にふさわしい女性論のシンポジウムであった。続いて二十五年目には、早稲田大学でミルサップス大学副学長キング教授を招いて講演があり、次の日早稲田大学国際比較会議へとつながった。このように見てくると、五年ごとの節目で本学会が、㈠基本的な「比較思想とは何か」「比較思想方法論」などの問題を追究する、㈡そのつどのホットイシューである生命倫理や女性論などを取り上げる、㈢国際的に開かれている、というような点をもって特色としていることが指摘できよう。

したがって、来るべき三十周年においても、このような本学会の特色が、再び三たび強調されることを願ってやまない。

いま女性論シンポに触れたが、本学会の特色は、設立当初から女性会員が多く、かつ女性会員の研究発表がさかんであったこと、そして三十年になんなんとする現在でも、東京例会を含めてその傾向が相変わらずいちじるしいことである。女性の進出ということが今あらためて見られるというのではなく、初めからコンスタントにそうであったし、今現にそうであるということである。私はそのことが本学会にフレクシビリティをあたえていると考えている。

フレクシビリティといえば、じつは、創設者の死に面した一昨年といい、さかのぼって十年目の初代会長の辞任の際といい、学会の勢い、学会の会員の意気込みに、大きなかげりが生ずるのではないかと懸念したのであった。十周年の記念大会の会長講演のとき、その後に行われるスケデュールの役員会をとび越えて、突然、中村博士の口から、「一番槍」、そして会長辞任という発言があったのである。大げさにいえば、集まっていた新聞記者は廊下

を走り、会員の心ある方々は学会の将来に大きな不安を持った。これがさきほど述べた紆余曲折の一つ、大きな一つであったことは言うまでもない。そして、一昨年の中村博士の死去のさいにも同様な体験があった。しかし、学会はいわば不死鳥のごとくそのたびごとに甦った。それは、中村博士のごとき不世出のリーダーが引っぱっていた学会において、十年、二十年、三十年の経過のなかで、博士が学会の中心にありながら、学会を超えた偉大な存在であったと同時に、学会と一体化し、私ども会員の心のうちに深く沈澱し、比較思想研究に打ち込むことという学問の正道が確立していたからにほかならないと考えられるのである。私などの懸念した会員の激減とか、研究発表の退嬰などの兆候は生じなかった。いやむしろ、微増とはいえ会員、しかも然るべき会員が増えており、かつ研究発表は質量ともに活発化しているのである。

このような学会の発展を支えているのは、言うまでもなく、いま触れたばかりの会員の方々の積極的な研究活動であり、現会長のもと中枢をなす理事・評議員、そして実際毎日の動きに棹さす事務局の縁の下の仕事なのである。そのためには、きわめて現実的なことだが、学会の資金の問題がある。もとより学会は会員の会費によって賄われるのであるが、三十周年の節目に何かやろうとすれば資金のいることは明らかである。ご承知のように、本学会は五年前からそのために有志の寄附をお願いし、本年がその完成年である。皆さんのご支援のおかげで、この不況の時に、百パーセントとはいえないが、ほぼ目標の達成へ漕ぎつけられる、またそのことを期待しているのが現状である。これによって、掲げられたいくつかの具体案、例えば海外よりスピーカーの招致、学会誌総目次の作成、学会三十年史の編集等々の、少なくとも一、二が実現し、あるいは実現へ向かってスタートすることが望まれるのである。

学会に課せられる今後の課題は少なくない。最後にその一つを挙げてこの稿を終わりたい。それは、秋季特別大会という例外的に年二回の大会を開いた十余年前の大会（坂出市ホール、濱野年宏実行委員長）に来ていただいた支部長の方々による、全国十余ヶ所（当時）で開催されてきた学会支部ないし地区の研究会のことである。これらの研究会が本学会を名実ともに全国学会たらしめていることは、認められねばならない。今もって東京地区研究例会をはじめ東北・新潟・東海・北陸・中四国・九州とほぼ全国にわたって顕著な活動が行われている。しかしここでもまた「世代交替」が生じていることを指摘しておきたい。活性化が実際あり、また活性化が期待されるところである。これまでその任に当たってくださった方々に感謝するとともに、新しい進路を望んでやまない。

（みねしま・ひでお、比較哲学・宗教哲学、前会長）